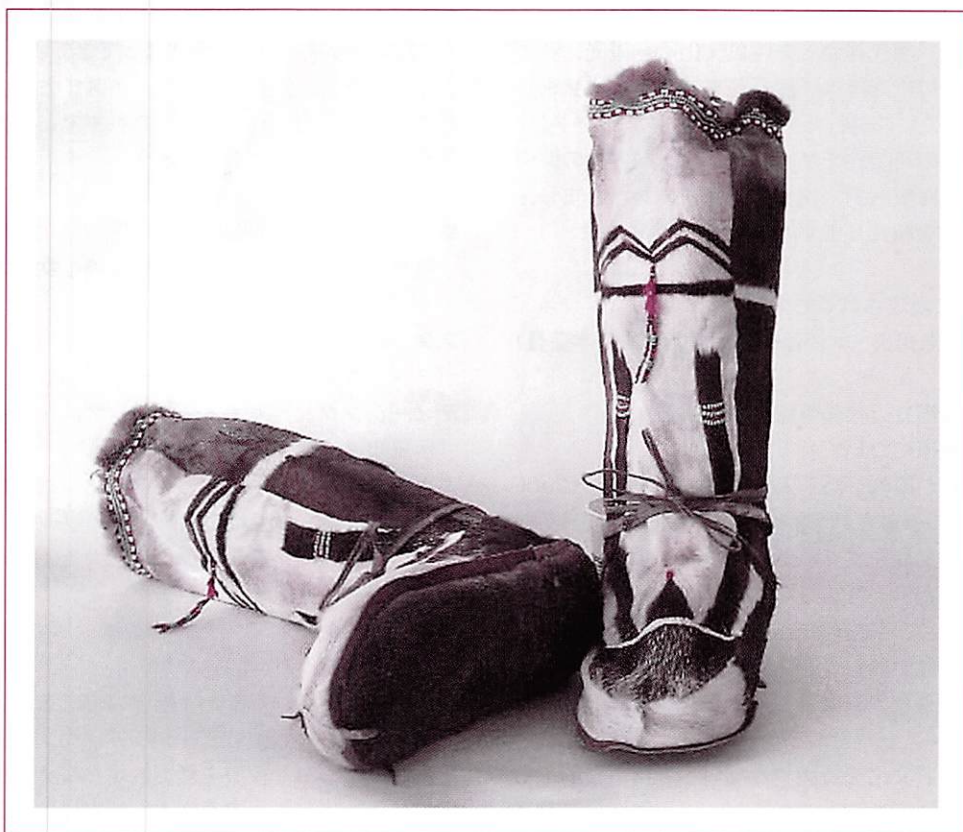




北方民族博物館だより

No.79



D11.13.23 ビーズ刺繍付トナカイ毛皮製長靴
チュクチ ロシア／カムチャツカ／スレドニーパハチ
底長さ28.1cm 幅12.9cm 高さ35.7cm

前側にトナカイの白い毛皮を、後ろ側と底に茶色い毛皮をつかったブーツである。水色、白、赤のビーズ刺繍で装飾が施されている。他の多くの北方民族の靴と同様に、くるぶしから甲の部分をしぼるためのひもがついる。白い毛皮と茶色い毛皮を縫い合わせて模様を作っているが、その縫い代は5mmもない

- 1 表紙 ビーズ刺繍付トナカイ毛皮製長靴
- 2-4 第25回北方民族文化シンポジウム
- 5 伝統のアイヌ文様と刺しゅう入門／はくぶつかんまつり
- 6-7 企画展「草原のデザイン」／講座「くらしの中のモンゴル紋様」
- 7 調査報告
- 8 INFORMATION



第25回北方民族文化シンポジウム

現代社会と先住民文化： 観光、芸術から考える②

2010.10.14,16-17

本年のテーマも「現代社会と先住民文化 ―観光、芸術から考える―②」で、昨年は「観光」を、今年は「芸術」を切り口としました。「伝統」と「非伝統」をキーワードに、芸術の変遷と今後の可能性をさぐりました。国内外の関係者から、さまざまな実践例や提言をご発表いただきましたので、以下に概略を紹介します。

● 第1部＜作品に表現されるもの＞

座長：出利葉 浩司氏（北海道開拓記念館 主任学芸員）

浅川 泰氏（北海道立近代美術館 学芸部長）
「アイヌの装飾美術について」

道立近代美術館が開催した「アイヌ文様の美」展（2006～07）は、国内に所蔵されているアイヌ民族の工芸品他によって、アイヌ文様をすぐれた美の遺産としてとり上げる本格的な展覧会であった。近年この他にも、民俗資料としてばかりではなく、芸術の視点（文様や工芸等）からアイヌ文化の位置づけや独自性を見直す展示の開催が増えており、文化伝承や普及の一環として、工芸の振興も図られてきている。

アイヌ民族の工芸文化を特徴づけているのは、装飾であり、その技法や文様であると考え、周辺民族の工芸文化や文様を取り入れつつ、地位的・集団的特色を発し、独自の様式をつくりあげた。美術の視点で博物館や美術館に収蔵されている資料を研究し、公開することは、アイヌ文化の位置や独自性を見直す契機となる。そして、装飾は新たな創作活動に活かされ、それらの展覧会や関連する出版物は、アイヌ文化の継承や発展にとって重要なものとなっている。

クリスティン・ラロンド氏（カナダ国立美術館 学芸員）
「生きることとイヌイトであること
―イヌイト・アートにおける自伝―」

イヌイトのアーティストたちは、彫刻、版画、絵画、布のアップリケといった芸術の創作活動を行ない、それらの作品には、暮らしのなかの実際の出来事、家族や自身の肖像が描写されている。しかし、一般的な認識は、イヌイトのイメージは作家個人の直接的なものではなく、イヌイト文化に特有で様式化された表現にとどまっているというものだ。

20世紀前半に季節的なキャンプ生活で育ち、後にアーティストになった世代から、都市化された生活の快適さと問題

との両方をもつ現代のコミュニティで育った新しい世代まで、三代にわたる作家たちの視覚芸術作品をたどってみた。すると、初期の作品に比べて近年の作品には、より個人的な経験が描かれるようになってきていることに気づく。こうした自伝的作品の研究は、イヌイト社会における個人の立場の変化を映し出す、これまでとは異なるアプローチや戦略を明らかにするだろう。

● 第2部＜伝統と創造＞

座長：広瀬 健一郎氏（鹿児島純心女子大学 准教授）

スタン・ベヴァン氏

（ノースウェスト・コミュニティ・カレッジ、フリーダ・ディージング北西海岸美術学校 教師・教科課程責任者）
「伝統知 ―我々の未来への礎―」

カナダやアメリカの北太平洋岸には、独自の芸術様式が知られている。1950年代から芸術の復興が始まり、アーティストとして活躍する人も徐々に増えた。その一人、ハイダ出身のフリーダ・ディージングは女性の木彫家であり、指導者としても優れていた。本校は、2002年に他界した彼女を記念して、06年にブリティッシュ・コロンビア州北部のテラスに設けられた美術学校である。

2年のカリキュラムで基本のデザインや道具作りといった基礎に始まり、模倣を経て、オリジナル作品の制作やマネジメントに至るまでを学ぶ。授業には、芸術のみならず儀礼などの文化全般が取り入れられており、他のアーティストや博物館等とも協力しながら進めている。



床 州生氏（ユーカラ堂 店主・アイヌ木彫作家）

「チョッケブーアイヌ・アートの可能性」

ひとくちにアートといっても、木彫りや刺しゅうなど有形のもののみならず、舞踊や音楽など昔から伝承されている表現物は多様である。これらは伝統を守っているものと、改変され現代的になっているものと、大きく2つに分けられる。伝統とされているものの自体、表現者はより良くしようと考え、受け継がれてゆくうちに変化をしている。いずれも大事で、伝統は新しいものを生みだすときの源となっている。

2006年に私の住む阿寒のホテルが、アイヌ文化を取り入れた客室をオープンさせた。アイヌ語の名称や文様の意味や使い方などについて我々がアドバイスをし、東京在住のデザイナーが全体のプロデュースを行ない、洒落たものになった。このとき、新しい感覚を取り入れた「融合」に、可能性を感じた。

今は、知的財産権について関心があり、また、「アイヌ・アート」と呼ぶにふさわしい品の確立や、販売のプロモーションをすることが必要だと考えている。

貝澤 珠美氏（シケレペ・アートデザイン事務所 代表
・デザイナー）

「アイヌとモダン」

～アイヌ模様を今の時代に表現する一つの方法～

生まれ育った平取町二風谷では、アイヌ語教室に通い、身近にアイヌ文化があったが、中学生になる頃から差別を受けることもあった。次第にアイヌ民族の血をひくことは隠したい、強くなろう！と思い続けた。

高校卒業後に通った専門学校で、デザインを勉強することの面白さを知った。自分にしかできないデザインは何かと考えたとき、アイヌ模様が浮かんだ。古い着物などから模様の基本などについて学んだ。アイヌ模様を現代風にアレンジしてカッコよくデザインすれば、差別や偏見を無くすきっかけとなるかもしれないと思い、服やインテリアなどのデザインを手がけている。さまざまな悩みも経て、今後は好きなアイヌ模様を活かして、新しいことに取り組んでいきたいと考えている。

● 第3部＜現地と世界の市場＞

座長：本多 俊和（スチュアート ヘンリ）氏

（放送大学教授）

緒方 しらべ氏（総合研究大学院大学 博士後期課程）

「ハイブリッドな生き方としてのアート」

—今日のアフリカンアートに錯綜する多彩な現実—

1990年代以降、アフリカ人による多様なアートを紹介する展示や活動が活発になり、それらの多くは、同時代人による作品としてアフリカの造形にアプローチし、植民地



時代よりずっと続いてきた偏見を乗り越えようとするものであった。

しかし、展示やカタログには、つくり手たちの多彩な営みがほとんど現れない。国際的に脚光を浴びるつくり手もいれば、現地に根付いた活動を続ける者もいる。

ナイジェリアに暮らす3人のつくり手について、それぞれに異なる市場・制作の動機・将来の希望などを報告した。国際的なアート・ワールドの権力を意識しつつも、多彩なアート活動のありかたと、研究者としてすべきことの可能性をさぐった。

窪田 幸子氏（神戸大学大学院 教授）

「アボリジニのアートにみるローカルとグローバルの接合—都市アボリジニ・アーティストの抵抗と交渉」

アボリジニ人口の大多数は、いわゆる「伝統的」な土地や神話とのつながりを奪われ、都市や地方都市で暮らしている人々で、都市アボリジニと呼ばれる。彼らのアートは多彩だが、共通する特徴もあり、それは「辺境からの表現の借用」、そして主流社会への「抵抗」や失われた「つながり」の再獲得といったテーマである。彼らにとってアートは、抵抗・怒り・政治であると同時に、アイデンティティの模索の表現でもある。

彼らは、主流社会が構築した国際的なアート・ワールドに包摂されながらも、それに抵抗し、構造を転覆させたいというジレンマを抱えている。現在も差別を経験し続けてはいるものの、海外美術展への派遣やパブリック・アートの作家として都市のアーティストが選ばれることが多く、彼らに公的な権限を与えるような状況が存在していることはまちがいない。

● 第4部「芸術の枠組みを超えて」

座長：岩崎グッドマン まさみ氏（北海学園大学 教授）

坂巻 正美氏（北海道教育大学岩見沢校 准教授）

「作品『けはいをきくこと…北方圏における森の思想』
—先住民文化探訪から彫刻概念の拡張へ—」

彫刻家ヨーゼフ・ボイス（1921～1986）は、作品「デュシャンの沈黙は過大評価されている」（1964）を発表し、「社会彫刻」という「拡張された芸術概念」を掲げ、「全ての人間は芸術家である」と主張した。私は、ボイス以降の現代の彫刻家として制作活動を展開するなか、大村敬一氏の著述に出会い、イヌイトが狩猟採集生活の伝統から獲得してきた思想を、主流社会との対話を続ける武器として振るい、自らが生きる場所として社会の形を作り上げていく活動に「社会彫刻」を見る思いがした。

現在制作中の自作は、こうした人類学研究の影響を受けて進めている。今も狩猟採集の知識を継承して生きる人々を訪ね、地域の歴史や取材先で出会う出来事を造形材料とし、自身の内的経験と重ね、造形として再構成するインスタレーションである。彫刻作品「けはいをきくこと…北方圏における森の思想」シリーズを通じて、彫刻概念のひとつの拡張として現代社会に先住民の叡智（えいち）を活用する方法をさぐっていきたい。

大村 敬一氏（大阪大学大学院 准教授）

「技術の魅惑／魅惑の技術
—『芸術』と『伝統文化』を超えて—」

芸術に関する最近の人類学的思考は、J.クリフォードらの議論により、アカデミズムや芸術市場といった権力の問題に拘泥するあまり、人類の普遍性を探求することを怠っ

てきた。アメリカ人類学の父であるF.ボアズが『プリミティヴ・アート』で指摘した「美的経験を生み出すことに関する人類の普遍性」を探求することは、欧米の「芸術」という概念を相対化するとともに、それに基づく芸術市場に先住民芸術を取り込んでしまう植民地主義的で新自由主義的な動向に歯止めをかけることにも繋がる。

ボアズの考えにA.ジェルの理論を導入し、芸術は「社交の技術」であるとの考えに至った。こうした人類の普遍性についての探求は、「先住民芸術」や「近代芸術」「現代芸術」など、欧米中心に構築されてきた概念枠から、つくり手も享受者も解放してくれる可能性がある。

● 総合質疑・討論

各発表と質疑応答などをふまえ、特に多くの関心が寄せられた「伝統と非伝統を分ける意味があるか」「国際的なアート・マーケットをどうとらえるか」「民族の芸術の将来のために、つくり手—博物館・美術館—研究者らは、それぞれの立場で何をすべきか」などについて、意見交換や議論がなされました。詳細は、年度末に刊行予定の報告書をご覧くださいと思います。

* * *

なお、関連事業として10月14日にドキュメンタリー映画『北極のナヌー』（2007年・アメリカ）の上映会を行いました。晩の開催にもかかわらず、子どもから大人まで多くの市民が鑑賞してくださいました。

（学芸グループ 齋藤玲子）



特別展関連講習会

「伝統のアイヌ文様と刺しゅう入門 ～カバラミプ技法による 巾着づくり～」

2010.10.2-3

講師 津田命子氏
(北海道立アイヌ総合センター学芸員)

10月中旬に終了した第25回特別展で「アイヌの装い」のイラスト付き解説パネルをご提供いただいた津田命子氏を講師に迎え、伝統的な文様と刺しゅうの基礎を教えていただきました。津田さんは、これまで博物館等に収蔵されている多数の着物などを調査し、その変遷や技法について研究成果を報告されています。今回は、新しい著作『伝統のアイヌ文様構成法によるアイヌ刺繍入門 カバラミプ編』（2010年／株式会社クルーズ発行）の一部をテキストとして用いました。

アイヌの木綿衣は、文様のつけ方によって異なる名称がついています。カバラミプはその一つで、広幅の木綿を切

り抜いて衣服に重ねて縫いとめ、その上から刺しゅうを施したものです。津田さんは、物差しや筆記具などの道具が無かった時代にどのように文様が作られたのかを研究し、布を折りたたんだ線に糸で印をつける方法を見つけました。

講習会では、置布となる白い晒と巾着の土台となる紺のシーチングを使いました。まず、置布の縫い代を残して、縦と横をそれぞれ半分の半分に折りたたみ4×4のマス目に折り線を付けます。土台布には、同じ寸法でしつけ糸で印を付けておきます。置布の折り線を目印に、曲線の文様を爪で描き、切り離します。それを土台布の糸印に合わせて置き、周囲を白い刺子用糸でカガリ縫いします。そのあ

と、置布の幅の半分的位置に紺色の刺子糸を置き、別の糸で押さえて留めるイカラリの技法で刺しゅうしました。

一日目を終えたあと、自宅ですべて作業を進め、二日目の予定時間内に多くの参加者が文様を仕上げることができました。講師の丁寧な指導と「間違いというのはない」というやさしい励ましの言葉で、アイヌ文様

の基本がわかって大変良かった、という声が多数寄せられました。

(学芸グループ 齋藤玲子)



第2回 はくぶつかんまつり

2010.11.3

昨年に引き続き、地域とのつながりを深め、博物館の利用を促進するための「はくぶつかんまつり」を開催しました。「衣」「食」「住」「遊び」をテーマにしたコーナーを開設し、大勢に博物館を楽しんでもいただきました。特に館内に建てたモンゴルの住居ゲルや、無料提供したカムチャツカ風サケ鍋、博物館クイズ、投げ縄が好評でした。

なお、ポータルバーニ・ファンクラブの皆さんに「メープルクッキー」「メープルホットケーキ」づくりで協力いただきました。



企画展

「草原のデザイナー— モンゴルの切り絵と紋様」

2010.11.1-12.15

共催：NPO法人北方アジア文化交流センター・
しゃがぁ

モンゴルの伝統的な衣服や生活用具には、特徴的な紋様が施されているものが数多くあります。こうした紋様を付ける際にもちいられてきたのが切り絵です。皮を切り抜いて紋様を形作ったり、切り抜いた紙や布を型にして、紋様を刺しゅうしたりしていました。現在では、切り絵は美術品として制作されるようになっています。



切り絵作品「仔馬」

本展示では、NPO法人 北方アジア文化交流センター・しゃがぁの所蔵資料から、中国・内モンゴル在住の切り絵作家アマルバト氏制作の切り絵作品をはじめ、さまざまなモンゴル紋様が施された生活用具の展示を通じて、モンゴルの伝統的な切り絵と紋様の文化を紹介しました。

切り絵制作者のアマルバト氏は、1940年、中華人民共和国・内モンゴル自治区赤峰市にモンゴル民族として生まれました。1964年に内モンゴル師範大学美術学部を卒業後、モンゴル民族の生活のなかで培われてきた芸術の研究に携わり、また、切り絵作家として中国国内のコンクールで数多くの受賞経験を持っています。現在、内モンゴル師範大学美術学院で教授の職にあり、中国第一級民間工芸美術家にも認定されています。

アマルバト氏の作品は、内モンゴルの風景や遊牧を営む人びとの日常、家畜の様子などを繊細な切り絵で表現したもの30点を展示しました。よくみると、モンゴルの伝統

的な紋様のデザインがちりばめられているものもあります。

また、紋様が施された実物資料として、衣服やブーツ、タバコ容器やお碗を入れる袋、イヤリングや指輪などの装飾品など、約60点を展示しました。

(学芸グループ 中田 篤)



切り絵作品「ナランホア（ひまわり）」

企画展関連講座

「くらしのなかのモンゴル紋様 —展示解説とスライド&トーク」

2010.11.20

講師：西村幹也氏（NPO法人 しゃがぁ・
理事長／当館・研究協力員）

開催中の企画展「草原のデザイナー—モンゴルの切り絵と紋様」の関連事業として、展示解説、スライド上映などを通じて、モンゴルの日常生活のなかで利用されている切り絵や紋様の現状を紹介しました。

最初に講堂で、モンゴルの自然の風景や野生動物、植物などを写したスライドを上映しながら、モンゴルの紋様についての講話をおこないました。

モンゴル語で紋様のことを「ヘー オガルズ」と言いますが、この「オガルズ」とは巨大な巻き角を持つアルガリ（野生のヒツジ）の雄をも意味します。モンゴルの伝統的生業・遊牧生活の身近にある形として、オガルズに代表さ

れる野生動物、家畜、植物など、身近な良い形がモンゴルの伝統的な紋様の元になっていると思われます。こうした良い形に囲まれることは幸運を招き、また豊かさの象徴とも考えられています。そのため、紋様は組み合わせられ、衣服やブーツ、生活用具に刺しゅうなどとして施されてきたのです。

かつて多くのものが手作りされていた時代には、日常的に手に入る材料を自分たちで加工していたので、紋様も自分たちで施すことができました。しかし、社会主義時代以降、既製品が流通するようになり、かつてのような装飾は難しくなっているようです。

講話の後、展示室で実際にそれぞれの資料や切り絵作品を見ながら、詳しい解説をしていただきました。

美しいスライドや講師の明快な語り口に、参加した方々の満足度も高かったようです。

(学芸グループ 中田 篤)



資料の説明をする西村幹也氏（左端）

2010年度調査報告

「サハ共和国・トンポ地区における エベンのトナカイ牧畜について」

2010.9.15-10.11

2008年度より、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」に参加しています。私自身のテーマは、地球温暖化がトナカイ牧畜に及ぼす影響の評価です。昨年度に引き続き、ロシア連邦サハ共和国のトナカイ遊牧キャンプで調査をおこないました。

調査には、氏族共同体と呼ばれるグループの協力を得ました。現在放牧地の移転中で、約800頭のトナカイの一部（70頭）をこの春から新放牧地に移しています。今回は、新放牧地での放牧作業に同行することができました。

毎日のトナカイの管理は、次のような具合です。夜間放し飼いのトナカイ群を朝にキャンプ地周辺に連れ戻します。日中はトナカイがキャンプ地付近から離れ過ぎないように管理し、日没後はふたたび自由に行動させるのです。

キャンプ地にはトナカイの好物の塩が置かれており、人がトナカイに直接塩を与えることもあります。この塩が、トナカイがキャンプ地から離れないようにする補助的な手段になっているのではないかと考えています。

また数頭のトナカイに付けられた鈴の音で群全体の動き

が把握されています。これは群がまとまっていなければできない方法ですが、私の経験では、トナカイは散らばってしまうのが普通だったので、このまとまりの強さには驚きました。

そして地球温暖化の影響について、現地の人びとの間ではほとんど実感されてはならず、実際にトナカイ牧畜にも影響は出ていないようでした。

次年度以降は、季節を変えて調査を実施するとともに、トナカイの肉や毛皮の売却量や金額、販路など、経済的な状況についても調べてみたいと考えています。

(学芸グループ 中田 篤)



ソリを引くトナカイ

開館20周年記念企画展『北にくらす子どもたち』

平成23年2月10日（木）～4月10日（日）

会場 当館特別展示室

観覧 無料

北方諸民族の文化の理解をさらに深めていただくため、親、親族、社会の中で育まれてきたさまざまな北方地域の子ども様を紹介いたします。来館した子どもたちが楽しめる工夫をこらした企画展です。

企画展解説会

2月20日（日）

①10:00～10:30

②15:00～15:30

会場 当館特別展示室

参加 無料



ウリチのこどもとゆりかご
撮影 S.V.スモリヤーク

開館20周年記念講演会

日時 平成23年2月11日（金・祝）
午後1時30分～3時

会場 オホーツク・文化交流
センター大会議室
（網走市北2条西3丁目
電話0152-43-3704）

講師 岡田淳子（当館館長）

聴講無料

北にくらす子どもたちのジェンダー（男女の社会的・文化的役割、違い）がどのようにして形作られてきたか、学校教育が北の子どもたちに何をもたらしたかをこれまでの調査と豊富な事例から紹介します。

INFORMATION

資料の寄贈



網走市のウイльта刺繍サークルフレップ会の皆さんから、長さ233cm、幅165cmの壁掛けが寄贈されました。この壁掛けには18枚のウイльта刺繍がほどこされたフェルトが、枝に花咲くように配置されています。

行事報告

◆10月2日（土）昭和のくらし博物館（東京）に於いて講座「ウイльтаの手仕事と切り絵」（講師：笹倉いる美主任学芸員）を開催しました。

◆10月23日（土）学芸員講座「カムチャツカ風サケ料理」（講師：渡部裕学芸員）を開催し、サケハンバーグとサケ鍋をつくりました。



◆11月6日（土）に津別町中央公民館に於いて「オホーツク再・発・見！ミュージアム体験講座」を開催しました。

◆11月23日（火）あばしりまなび塾フェスティバルに参加し「オホーツク式土器型キーホルダーづくり」を開催しました。

消防訓練

10月26日に消防訓練を実施しました。

Twitterはじめました

Twitterをはじめました。よりタイムリーな話題をお届けしています。当館公式サイトのトップページからご覧になれます。

北方民族博物館だより
No. 79

平成22(2010)年12月22日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会